

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
 ☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>
 第655号 2024年9月8日

山手教会史の空白を埋める発見(3)

横浜開港資料館所蔵

THE JAPAN WEEKLY MAIL May 19, 1906

ザ ジャパン ウィークリー メール

(明治39年5月19日付)

「聖心教会の献堂」(訳・続き)

聖堂の正面玄関の上に置かれた新しいオルガンは、ヴェルサイユ(フランス)のMons. J. Abbey社によって建造された。輸送の途上で受けた少しの損傷はMr.C. Thwaillesによって修復された。彼はこの楽器を新しい家に組み立てる任を担った。このオルガンは大きさ(size)と機能(power)においてクライストチャーチやユニオンチャーチのそれに及ばないにしても聖堂の必要を見事に満たしている。優れた特徴として、オルガニストが演奏台(console)に対してオルガン(パイプ群の意)を背にして座るといふ点がある。これにより彼は典礼の進行を見渡せ、また聖歌隊に向って指示を与えることが可能なのである。

このオルガンには2つの手鍵盤があり、伴奏に適したいくつかの非常に柔らかい音色のストップ(音栓)を持っている。フルパイプの音色は優れているが、我々の意見としてはリードパイプがフル・クレッシェンドにおいて少々過大であり、しっかりとした基音群がぜひ必要であるといえる。この点に関しては、いずれ楽器が落ち着いた将来に改善を見るであろう。

奉納 (Offertory) の間オルガニストは数分間の即興演奏を行って、この新オルガンの効果的ストップの組合せの優秀さを披露する機会となった。

仕様は次のとおりである。

Great Organ (CC. to A7, 56鍵)

Bourdon	16	フィート
Bourdon	8	
Montre	8	
Flute Harmonique	8	
Prestant	4	

Swell Organ (CC. to A", 56鍵)

Trompet	8	フィート
Cor de Nuit	8	
Viole de Gamba	8	
Voix Celeste	8	
Flute Octave	4	
Octavin	2	

Pedal Organ (CCC to F, 30鍵)

Soubasse	16	フィート
Basse	8	

Accessories (付属装置):

Tremulant (トレモロ)

One composition to Swell

(ストップの増減で音量を調節するペダル)

Couplers (連結装置):

Swell to Great, Swell to Pedal, Great to Pedal

聖心教会の聖職者と信徒に対しては、その名にふさわしい楽器を得たことを心よりお祝い申し上げたい。昨日行われた音楽礼拝は出席者を大そう喜ばせるものであった。信徒たちがハイドン、モーツァルト、シューベルト等々のミサ曲を聴くことができる日もそう遠くないことであろう。

日曜日に献堂された聖心教会の前身は、1862年現代日本初の宣教師Gerard (ジラル) (*) 神父によって居留地80番に建てられた。当初それは大きな日本家屋のような姿であったが、年を経て度々の改築を重ねた。初期のファサード様式はギリシャ風であったが、28年程前ゴシック式に改変された。その他の重要な変更は1875年になされ、ついに殆どの信徒たちが居住する山手に移転することで解決を見た。旧建物の多くの建材料が新しい建物に再利用され、“樫”が良い保存状態で利用できることが分った。

必要とされた構造的変更はエドモンド・パピノ神父によってなされたが、これは新聖堂の美観によって称賛されることであろう。

この教会の長きにわたる在任期間は、Gerard (*) 師、Marin (マラン) 師とPettier (ペティエ) 師という3人の司祭によって担われてきた。後者は1868年に来日し、約13か月をMarin師と過ごし、人々の人望ゆえに1872年函館へ派遣され着任した。

山手の本通りに面して44番地を占め、居留地からも、故郷や隣国からも遠望されるような煉瓦造りの新教会は、13世紀のゴシック様式で、石と煉瓦でできた89フィート (約27メートル) の高さがある2基の塔が並び立ち、3層をなして八角形の塔頂を戴き、それぞれ4つの小塔が付属している。両方の塔の間のバラ窓はオルガン廊 (loft) に光を与えている。左の塔下の堂内は洗礼盤の場所として予定されている。新しい建物の内部の長さは108フィート (約33メートル) で、幅は中央身廊 (nave) が18フィート (約5.5メートル) 側廊 (aisle) 部が各12フィート (約3.7メートル) の計42フィート (約12.8メートル)、中央身廊部の天井の高さは34フィート (約10.4メートル)、両側の側廊の高さは15フィート (約4.6メートル) である。

聖堂内の両側には聖母マリアと聖ヨセフの小祭壇

(chapel)がある。この教会の内陣 (sanctuary) は7つを越えるステンドグラスで照らされており、中央部分は十字架上の救世主である。この建物は強固な枠組みで造られ、強い梁がしっかりと組み合わされて建てられている。その音響 (acoustic qualities) は称賛に値する。すべてに電気照明が備えられてもいる。

宣教会に所属する神父たちが同じ境内において、長い間、故Mr. Witkowskiの住宅であった家を取得したことも特筆すべきことと言えるであろう。

(注：この司祭館も大震災で倒壊している)

(*) 原文にはGerardと書かれているが、正しい表記は Prudence Girard。

ちなみにGerardは、現在の元町公園付近で瓦製造所を営んでいたジェラル。

追記：653号掲載の(1)でソウル天主堂 (明洞聖堂) のオルガンに関して記しましたが、これは『日本のオルガンⅡ』の巻末に収録された「パイプオルガンに就て」(昭和7年、日本楽器製造株式会社発行)の写真付きで記載された内容に依拠しました。一方、『オルガンの芸術』第Ⅳ章「オルガンとその音楽の歴史」の中で、11 - eアジア諸国の執筆を担当したオルガニストの松居直美氏は、「20世紀初頭に、ソウル市繁華街にある明洞大聖堂に、フランスの建造家シャルル・ミュタン (1861-1931) のフランスシンフォニック様式のオルガンが設置されたが現存しない」(P.309)としており、設置年代を考慮すればコルの後継者ミュタンの作とする妥当性もあります。いずれにしても作品が現存しないがゆえの断定の難しさを痛感しつつ本稿を終わります。